

9-12 陸上動物

9-12 陸上動物(鳥類、哺乳類、両生・爬虫類、昆虫類)

9-12-1 調査結果の概要

(1) 調査項目

1) 陸上動物相の状況

生息種及び生物相の特徴(鳥類、両生・爬虫類、哺乳類、昆虫類)

2) 注目すべき種の分布状況

(2) 調査方法

1) 鳥類

① ラインセンサス法

調査地域内にあらかじめ設定したルートを時速約2km程度で歩きながら、ルート
の片側25m(両側50m)に出現した鳥類を姿や鳴き声によって識別し、個体数を記録し
ていく方法。7~8倍の双眼鏡を使用して行った。調査範囲内に2ルートを設定した。

② 定点調査法

調査地域内にあらかじめ設定した定点において、一定時間(1時間)に出現した鳥
類を姿や鳴き声によって識別し、個体数を記録していく方法。20~60倍の望遠鏡と
7~8倍の双眼鏡を使用して行った。調査範囲内に2地点を設定した。

③ 任意観察

調査地域内を任意に踏査し、姿や鳴き声によって出現した鳥類を記録する。主に
ラインセンサス法、定点センサス法で出現しなかった種や保全すべき種に留意した。

④ 夜間調査

フクロウ等の夜間に活動する鳥類を対象として任意に鳴き声の確認を行った。

⑤ 猛禽類調査

調査地点に配置した調査員が8~10倍程度の双眼鏡、20~60倍程度の望遠鏡を用
いて飛翔等の猛禽類の行動を観察した。各地点間は無線機で連絡を取り合い、より
正確な位置の特定に努め、観察時間、飛行軌跡、飛行高度、指標行動(誇示行動、
餌運び、とまり、鳴き声等)、個体数、個体の特徴(年齢・性別、羽の欠損、標識等)
等の確認し得た情報を記録し、可能であれば写真撮影を行った。また、調査時の天
候、風の状況、各地点からの可視領域も合わせて記録した。上記調査の他に必要時
応じて林内踏査及び営巣木調査を行った。なお、猛禽類調査の詳細は別冊の非公開
資料として調査報告書を取りまとめた。

2) 哺乳類

① フィールドサイン法

調査対象範囲内を任意に踏査し、哺乳類の痕跡(足跡、糞、食痕、巣、鳴き声、死体

など)を確認し、記録した。

② 夜間調査

哺乳類は夜行性の種が多く、主に夜間に直接姿を確認しやすいため、夜間調査を実施した。日没後、車で任意に移動し、姿や鳴き声を確認した。また、同時にバットディテクターを使用し、コウモリ類の確認を行った。

③ 小型哺乳類トラップ調査

小型哺乳類の捕獲を目的としたもので、シャーマン式トラップを使用し、調査範囲内に4地点を設定し、各地点に20個設置した。

④ 無人撮影装置

シカ・タヌキ・キツネ・イタチなどの中大型哺乳類の確認のため無人撮影装置を用いた。調査地範囲内において哺乳類の獣道、林道、掘り返し痕などに任意に数カ所、1～7晩設置した。

3) 両生・爬虫類

① 任意踏査

調査地域内を任意に踏査し、両生類では成体、幼生、卵のう、爬虫類では成体及び抜け殻等で生息種を確認し記録した。

② 夜間踏査

両生・爬虫類は夜行性の種も多いため、夜間調査を実施した。日没後、調査地域内を任意に踏査し、姿や鳴き声の確認を行った。

4) 昆虫類

① 任意採集

目撃によって判別できる種はその場で記録し、通常は捕虫網で捕獲する方法とビーティングネットを使用して捕獲する方法を用いた。捕虫網で捕獲する方法は任意に捕虫網を振って採集する方法と、トンボやチョウ等の特定の昆虫類を狙って採集する方法がある。ビーティングネットを使用して捕獲する方法は任意に低木や草などをたたいてネット上に落ちた昆虫類を採集する方法である。この他、倒木や石の下の昆虫類、樹液に集まる昆虫類を見つけて採る方法も合わせて行った。

② ライトトラップ法

夜間にライトを照らしてそこに来た昆虫類を捕獲するものである。昆虫類の走光性を利用したもので、波長の短い光を出すブラックライトを使用するとより効果がある。白い幕にライトを照らし集まった昆虫類を採集するカーテン式の方法を調査範囲内に1地点(L1)設定し、ボックスの上にライトを照らし集まった昆虫類が下のボックスに落ちるボックス式の方法を調査範囲内に3地点(L2-L4)設定し、合計4地点で行った。

③ ベイトトラップ法

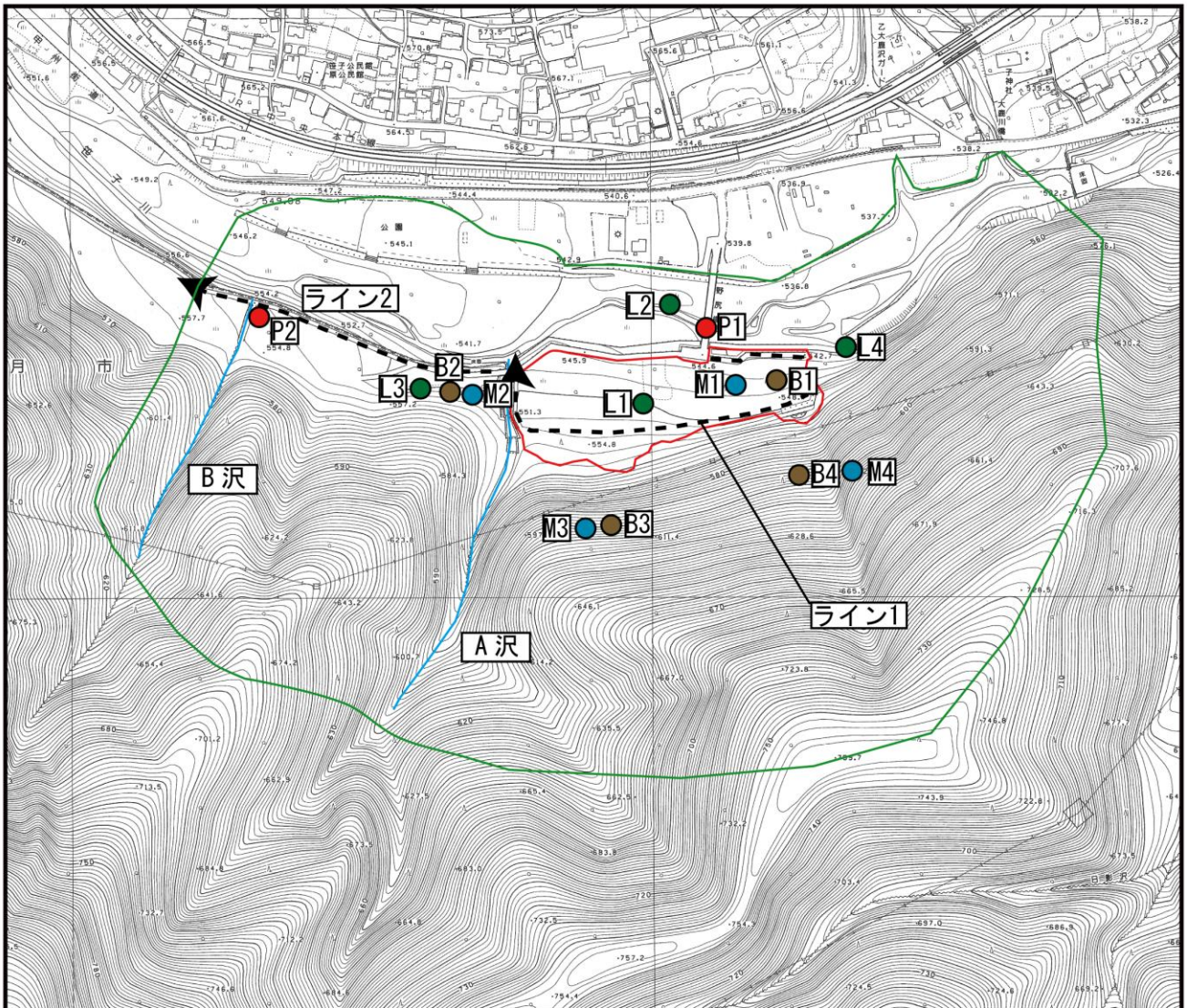
主に地表徘徊性のゴキムシ類、アリ類などを捕獲するもので、穴を掘ってプラスチックのコップを埋め、その中に肉類、蜜類などを入れておき一晩置いて、次の日に回収するものである。調査範囲内に4地点設定し、1地点につき20個を設置した。

(3) 調査地域・調査地点

陸上動物への影響が及ぶおそれがあると認められる地域とし、概ね計画地内及び計画地の外周より200m以内の範囲とした。陸上動物調査ルート及び地点の概要は表9-12-1に、陸上動物の調査範囲は図9-12-1に示すとおりである。なお、猛禽類調査の調査地域及び調査地点については別冊の非公開資料として調査報告書を作成し、それに記述している。

表9-12-1 陸上動物調査ルート及び地点の概要

	調査内容	ルート・地点名	位置	調査地点設定理由
鳥類調査	ラインセンサスルート	ライン1	計画地内	計画地内における鳥類の生息状況を把握する
		ライン2	計画地周辺	計画地周辺における鳥類の生息状況を把握する
	定点調査	P1	計画地内北野尻橋上	水辺周辺及び計画地周辺南部から南東部における鳥類の生息状況を把握する
		P2	計画地周辺西部笹子川とB沢の合流点付近	水辺周辺及び計画地周辺南西部における鳥類の生息状況を把握する
	調査内容	調査地点名	位置	調査地点設定理由
哺乳類調査	小型哺乳類トラップ調査	M1	計画地内	計画地内における小型哺乳類の生息状況を把握する
		M2	計画地周辺西部(広葉樹林内)	計画地周辺西部における小型哺乳類の生息状況を把握する
		M3	計画地周辺南部(針葉樹林内)	計画地周辺南部における小型哺乳類の生息状況を把握する
		M4	計画地周辺東部(針葉樹林内)	計画地周辺東部における小型哺乳類の生息状況を把握する
	調査内容	調査地点名	位置	調査地点設定理由
昆虫類調査	ベイトトラップ調査	B1	計画地内	計画地内における地表徘徊性昆虫の生息状況を把握する
		B2	計画地周辺西部(広葉樹林内)	計画地周辺西部における地表徘徊性昆虫の生息状況を把握する
		B3	計画地周辺南部(針葉樹林内)	計画地周辺南部における地表徘徊性昆虫の生息状況を把握する
		B4	計画地周辺東部(針葉樹林内)	計画地周辺東部における地表徘徊性昆虫の生息状況を把握する
	ライトトラップ調査	L1	計画地内	計画地内における走光性昆虫の生息状況を把握する
		L2	計画地周辺北部(笹子川脇)	笹子川に生息する水生昆虫(トビケラなど)の成虫の生息状況を把握する
		L3	計画地周辺西部(針葉樹林縁)	計画地周辺西部における走光性昆虫の生息状況を把握する
		L4	計画地周辺東部(針葉樹林縁)	計画地周辺東部における走光性昆虫の生息状況を把握する



大月市基本図 吉久保(大月市)

凡例

- : 計画地
- : 陸上動物調査範囲
- ▶ : ラインセンサスルート
- : 鳥類定点調査地点
- : 小型哺乳類トラップ地点
- : 昆虫類ライトトラップ地点
- : 昆虫類ベイトトラップ地点



図9-12-1 陸上動物(鳥類、哺乳類、両生・爬虫類、昆虫類)調査地点位置図

(4) 調査時期・頻度

1) 鳥類、哺乳類

4季(春・夏・秋・冬)で行った。猛禽類調査については、平成24年から平成26年の表9-12-2に示す月に調査を行った。

表9-12-2 猛禽類調査の調査方法及び調査時期

調査項目	主な内容	調査月							
		3月前半	3月後半	4月	5月	6月	7月	8月	9月・10月
定点調査 林内踏査 ^{※1}	営巣地特定及び繁殖状況調査	○	○	○	○	○	○	○	
	幼鳥調査 ^{※2}								○
	営巣木調査								○
	調査回数	1回	1回	1回	1回	1回	1回	1回	1回
	定点数(調査員数)	3	3	3	2	2	2	2	2
	調査日数	2日間	2日間	2日間	2日間	2日間	2日間	2日間	2日間

※1：林内調査は基本的に定点調査に併せて実施するが、営巣木測定はクマタカ巣立ち後の9月以降に実施する。

※2：必要に応じて幼鳥調査を実施し、営巣中心域を把握する。

2) 両生・爬虫類、昆虫類

3季(春・夏・秋)で行った。

(5) 調査結果

1) 現地調査

① 現地調査期日

各項目の調査期日は表9-12-3に示すとおりである。なお、猛禽類調査の調査日程は別冊の非公開資料に記述した。

表 9-12-3 陸上動物の現地調査期日

項目	調査手法	調査内容
鳥類	ラインセンサス調査 定点センサス調査	平成24年7月28日(夏季：繁殖後期)
		平成24年10月12日(秋季：秋の渡り期)
		平成25年2月2日(冬季：越冬期)
		平成25年5月5日(春季：春の渡り期)
		平成25年6月1日(春季：繁殖前期)
	任意踏査	平成24年7月27日-28日(夏季：繁殖後期)
		平成24年10月10日-12日(秋季：秋の渡り期)
		平成25年2月1日-2日(冬季：越冬期)
		平成25年5月5日(春季：春の渡り期)
		平成25年5月31日-6月1日(春季：繁殖前期)
	夜間調査	平成24年7月27日(夏季：繁殖後期)
		平成24年10月12日(秋季：秋の渡り期)
平成25年2月2日(冬季：越冬期)		
平成25年5月4日(春季：春の渡り期)		
平成25年5月31日(春季：繁殖前期)		
哺乳類	フィールドサイン法	平成24年7月27日-28日(夏季)
		平成24年10月10日-11日(秋季)
		平成25年2月1日-2日(冬季)
		平成25年5月31日-6月1日(春季)
	夜間調査	平成24年7月27日(夏季)
		平成24年10月10日(秋季)
		平成25年2月1日(冬季)
		平成25年5月31日(春季)
	トラップ調査	平成24年7月27日-28日(夏季)
		平成24年10月10日-11日(秋季)
		平成25年5月31日-6月1日(春季)
	無人撮影装置	平成24年7月27日-28日(夏季)
平成24年10月10日-11日(秋季)		
平成25年2月1日-2日(冬季)		
平成25年5月31日-6月1日(春季)		
両生・爬虫類	任意踏査	平成24年7月27日-28日(夏季)
		平成24年10月10日-11日(秋季)
		平成25年5月31日-6月2日(春季)
	夜間調査	平成24年7月27日(夏季)
		平成24年10月10日(秋季)
昆虫類調査	任意調査	平成24年7月28日-29日(夏季)
		平成24年10月11日-12日(秋季)
		平成25年5月31日-6月2日(春季)
	ライトトラップ調査 ベイトトラップ調査	平成24年7月28日-29日(夏季)
		平成24年10月11日-12日(秋季)
		平成25年6月1日-2日(春季)

② 確認種数

各項目の確認種数は表 9-12-4 に示すとおりである。

表 9-12-4 陸上動物の確認種数一覧

項目	確認種数	対象事業実施区域		保全すべき種確認種数
		計画地内	周辺域	
鳥類	8目25科53種	22種	53種	3種
哺乳類	7目13科19種	7種	19種	4種
両生・爬虫類	2目7科12種	2種	11種	2種
昆虫類	17目181科729種	390種	541種	2種

③ 陸上動物相の状況

ア. 鳥類

ア) 確認概要

現地調査の結果、8目25科53種の鳥類を確認した。確認した鳥類のリストは表 9-12-5 に示すとおりである。計画地内では22種が確認され、アオゲラ、ヒガラ、ヤマガラ等の樹林に生息する種、キセキレイ、カワガラス等の主に水辺周辺に生息する種、ホオジロ、カワラヒワ等の主に農耕地や草地に生息する種を確認した。周辺域では52種を確認した。周辺域は森林環境が多いため、ヤマドリ、アオバト、アカゲラ、ビンズイ、エゾムシクイ、キビタキ等の主に樹林に生息する種を確認した他、笹子川沿いでアオサギ、カルガモ、セグロセキレイ、カワガラス等の主に水辺に生息する種も多く確認した。

渡り区分については図 9-12-2 に示すとおり、留鳥が全体の63%(33種)を占め、全体の約 2/3 であった。なお、クマタカは別途実施の猛禽類調査での確認であり、出現状況等の詳細は非公開資料として別報告書にて記述、報告している。

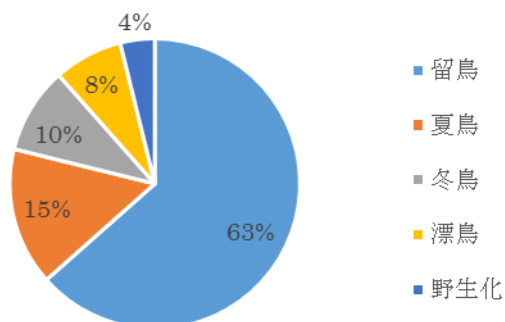


図 9-12-2 確認した鳥類の渡り区分の割合

表9-12-5 鳥類確認種リスト

No.	目名	科名	種名	学名	事業計画地内	周辺域	渡り区分
1	コウノトリ目	サギ科	アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>		1	留鳥
2	カモ目	カモ科	オシドリ	<i>Aix galericulata</i>		1	留鳥
3			カルガモ	<i>Anas poecilorhyncha</i>		4	留鳥
4	タカ目	タカ科	トビ	<i>Milvus migrans</i>		4	留鳥
5			ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>		1	留鳥
6			クマタカ※	<i>Spizaetus nipalensis</i>		○	留鳥
7	キジ目	キジ科	コジュケイ	<i>Bambusicola thoracica</i>		1	野生化
8			ヤマドリ	<i>Syrmaticus soemmerringii</i>		1	留鳥
9	ハト目	ハト科	キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	3	6	留鳥
10			アオバト	<i>Sphenurus sieboldii</i>		1	留鳥
11	ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>		1	留鳥
12	キツツキ目	キツツキ科	アオゲラ	<i>Picus awokera</i>	2	5	留鳥
13			アカゲラ	<i>Dendrocopos major</i>		1	留鳥
14			コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	3	1	留鳥
15	スズメ目	ツバメ科	ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>		8	夏鳥
16			イワツバメ	<i>Delichon urbica</i>		2	夏鳥
17		セキレイ科	キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>	2	9	留鳥
18			ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>	1	6	留鳥
19			セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>	2	11	留鳥
20			ピンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i>		1	漂鳥
21		ヒヨドリ科	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	4	18	留鳥
22		モズ科	モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	1	5	留鳥
23		カワガラス科	カワガラス	<i>Cinclus pallasii</i>	4	11	留鳥
24		ミノサザイ科	ミノサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>		1	留鳥
25		ツグミ科	ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i>		3	漂鳥
26			ジョウビタキ	<i>Phoenicurus aureoreus</i>		1	冬鳥
27			ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>		1	冬鳥
28		チメドリ科	ガビチョウ	<i>Garrulax canorus</i>	2	1	野生化
29		ウグイス科	ヤブサメ	<i>Urosphena squameiceps</i>	1	4	夏鳥
30			ウグイス	<i>Cettia diphone</i>	3	11	留鳥
31			エゾムシクイ	<i>Phylloscopus borealoides</i>		3	夏鳥
32			センダイムシクイ	<i>Phylloscopus coronatus</i>		1	夏鳥
33		ヒタキ科	キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>	1	8	夏鳥
34			オオルリ	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>		2	夏鳥
35			コサメビタキ	<i>Muscicapa dauurica</i>		4	夏鳥
36		エナガ科	エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	2	7	留鳥
37		シジュウカラ科	ヒガラ	<i>Parus ater</i>	2	5	留鳥
38			ヤマガラ	<i>Parus varius</i>	2	9	留鳥
39			シジュウカラ	<i>Parus major</i>	4	18	留鳥
40		メジロ科	メジロ	<i>Zosterops japonicus</i>	4	15	留鳥
41		ホオジロ科	ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	3	19	留鳥
42			カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>		1	冬鳥
43			アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>		2	漂鳥
44		アトリ科	カワラヒワ	<i>Carduelis sinica</i>	1	12	留鳥
45			マヒワ	<i>Carduelis spinus</i>		1	冬鳥
46			ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i>		4	冬鳥
47			ウソ	<i>Pyrrhula pyrrhula</i>		1	漂鳥
48			イカル	<i>Eophona personata</i>	1	7	留鳥
49		ハタオリドリ科	スズメ	<i>Passer montanus</i>		5	留鳥
50		ムクドリ科	ムクドリ	<i>Sturnus cineraceus</i>		8	留鳥
51		カラス科	カケス	<i>Garrulus glandarius</i>	1	1	留鳥
52			ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>		9	留鳥
53			ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>		16	留鳥
合計	8目	25科	53種		22種 49羽	52種 279羽	-

種名及び配列は平成24年度版「河川水辺の国勢調査のための生物種リスト(財団法人リバーフロント整備センター)」に従った。

注：数字は確認個体数を示す。

※：クマタカは別途実施の猛禽類調査での確認による。

イ) ラインセンサス調査結果

ラインセンサス1及び2における調査結果は表9-12-6～7に示すとおりである。ライン1(事業計画地内)では22種、ライン2(周辺域)では25種の鳥類を確認した。出現状況を見ると、ライン1ではヒヨドリ、シジュウカラ、メジロ、ライン2ではキセキレイ、ホオジロ、ハシブトガラス等の留鳥を多く確認した。季節別にみると、春の渡り期にライン1では13種、ライン2では21種で最も種数が多かった。春の渡り期は多くの夏鳥が渡来する時期であり、調査地区においてもヤブサメ、エゾムシクイ、キビタキ、コサメビタキ等の夏鳥を確認した。次に鳥類の多様度をみると、春の渡り期に高く、秋の渡り期から越冬期にかけて低くなる傾向がみられた。

表9-12-6 ラインセンサス調査結果

No.	種名	ライン1(計画地内)					ライン2(周辺域)				
		繁後	秋渡	越冬	春渡	繁前	繁後	秋渡	越冬	春渡	繁前
1	カルガモ										1
2	キジバト	1			1	1				3	
3	アオゲラ				1	1					
4	コゲラ	2		2		2					
5	ツバメ						3			2	
6	キセキレイ		1			1				1	
7	ハクセキレイ	1					1				
8	セグロセキレイ		1	2						1	
9	ヒヨドリ	3	4		5	4	1	4		7	3
10	モズ		1								
11	カワガラス	2	1	2	1		1	2		1	
12	ガビチョウ		1			1	1			2	
13	ヤブサメ				1					1	
14	ウグイス	2			1	2					1
15	エゾムシクイ									1	
16	キビタキ				1					3	1
17	コサメビタキ									1	
18	エナガ	1		2							
19	ヒガラ		3	1							
20	ヤマガラ	3			1					2	
21	シジュウカラ	2		6	2	1	3	5	2	3	2
22	メジロ	1	4		4	3	2	1		2	1
23	ホオジロ	6	2		5				1	3	1
24	アオジ								1		
25	カワラヒワ				2					3	
26	イカル					1				1	
27	ムクドリ						4			4	
28	カケス				2					3	
29	ハシボソガラス									2	
30	ハシブトガラス									1	
合計	30種	11種	9種	6種	13種	10種	8種	4種	3種	21種	7種
		22種					25種				

注：数字は確認個体数を示す。

表 9-12-7 鳥類の種数、優占種及び多様度指数(ラインセンサス結果)

ルート	ライン1					ライン2				
季節	繁後	秋渡	越冬	春渡	繁前	繁後	秋渡	越冬	春渡	繁前
確認種類数	11種	9種	6種	13種	10種	8種	4種	3種	21種	7種
	22種					25種				
優占種	ヒヨドリ・シジュウカラ・メジロ					キセキレイ・ホオジロ・ハシブトガラス				
Shannon-Wienerの 多様度指数 H'	3.21	2.91	2.34	3.38	3.10	2.78	1.78	1.50	4.15	2.65
	3.92					4.02				

ウ) 定点調査結果

定点調査P1（周辺域東）及びP2（周辺域西）における調査結果は表9-12-8～9に示すとおりである。P1では32種、P2では25種の鳥類をそれぞれ確認した。出現状況を見ると、P1ではキセキレイ、ホオジロ、ハシブトガラス、P2ではヒヨドリ、メジロ、ムクドリ等の留鳥が多く確認され、ラインセンサス調査結果と比較して出現状況に大きな変化はみられなかった。季節別にみると、P1では繁殖前期に20種、P2では春の渡り期に13種で最も種数が多かった。これらの出現傾向もラインセンサス調査結果と比較して大きな変化はみられなかった。次に多様度指数をみると、P1では越冬期、P2では繁殖後期から秋の渡り期にかけてやや低くなる傾向がみられた。

表9-12-8 定点調査結果

No.	種名	P1(周辺域東)					P2(周辺域西)				
		繁殖後	秋渡	越冬	春渡	繁殖前	繁殖後	秋渡	越冬	春渡	繁殖前
1	トビ		1								
2	コジュケイ									1	
3	キジバト		1		1	1					
4	カワセミ								1		
5	アオゲラ		1				2				
6	コゲラ		1	1		1	1		1	1	
7	ツバメ	3			2	5	2				
8	イワツバメ	1									
9	キセキレイ	2	1	1	1	1					
10	ハクセキレイ	1				1					
11	セグロセキレイ		2	2	1	1		1	1		
12	ヒヨドリ	1	2		6	6	2	4	1	3	
13	モズ		1					1			
14	カワガラス		2	2		1	1				
15	ルリビタキ			1							
16	ガビチョウ		1		1				1	1	
17	ヤブサメ				1						
18	ウグイス	2				1	2		1	1	
19	エゾムシクイ								1		
20	キビタキ				1	1			1	1	
21	コサメビタキ				1						
22	エナガ			6							
23	ヒガラ					1	2				
24	ヤマガラ					1	1		2		
25	シジュウカラ		2	3	2	1		1	1	1	
26	メジロ	8	1		2	3	2	3		3	
27	ホオジロ	4	3	2	3	3	1	1	2	1	
28	カララヒワ	5	5			1	1		2	1	
29	ベニマシコ			1					1		
30	イカル				1	1		2		2	
31	スズメ	1				2					
32	ムクドリ				4	1	9				
33	カケス		1		1			1	1		
34	ハシボソガラス				1			1		1	
35	ハシブトガラス	1	2	1	1	1	2		1	1	
合計	35種	11種	16種	10種	17種	20種	11種	9種	11種	13種	10種
		32種					25種				

備考) 数字は確認個体数を示す。

表 9-12-9 鳥類の種数、優占種及び多様度指数(定点調査)

定点	P1					P2				
季節	繁後	秋渡	越冬	春渡	繁前	繁後	秋渡	越冬	春渡	繁前
確認種類数	11種	16種	10種	17種	20種	11種	9種	11種	13種	10種
	32種					25種				
優占種	キセキレイ・ホオジロ・ハシブトガラス					ヒヨドリ・メジロ・ムクドリ				
Shannon-Wienerの 多様度指数 H'	3.05	3.78	3.01	3.76	3.95	2.98	2.98	3.38	3.58	3.06
	4.41					4.20				

エ) 任意調査結果

任意調査における調査結果は表 9-12-10 に示すとおりである。任意調査はラインセンサスや定点調査以外で確認した種や他の調査項目実施時に確認した鳥類を主に記録した。任意調査では 41 種の鳥類を確認した。このうち、ラインセンサス及び定点調査で確認されなかった種はアオサギ、オシドリ、ハイタカ、ヤマドリ、アオバト、アカゲラ、ビンズイ、ミソサザイ、ジョウビタキ、ツグミ、センダイムシクイ、オオルリ、カシラダカ、マヒワ、ウソの 15 種であった。任意調査ではハイタカやアオバトなど比較的出現例数の少ない鳥類を確認した。

表 9-12-10 任意調査結果

No.	種名	任意				
		繁後	秋渡	越冬	春渡	繁前
1	アオサギ	1				
2	オシドリ	1				
3	カルガモ	1			1	
4	トビ		2		1	
5	ハイタカ			1		
6	ヤマドリ			1		
7	アオバト					1
8	アオゲラ	1	2			
9	アカゲラ		1			
10	コゲラ		1	2	1	
11	キセキレイ		2			
12	ハクセキレイ		1			
13	セグロセキレイ	1		1		
14	ビンズイ		2			
15	ヒヨドリ	2	2		1	
16	モズ	1	1			
17	カワガラス		2	2		
18	ミソサザイ			1		
19	ルリビタキ			2		
20	ジョウビタキ			2		
21	ツグミ			1		
22	ガビチョウ	1	1			
23	ウグイス	1	2		1	
24	センダイムシクイ	2				
25	オオルリ	1				1
26	エナガ	1	2	2	1	1
27	ヒガラ	1	1			
28	ヤマガラ	1	2	1		
29	シジュウカラ	1	2	2	1	
30	メジロ	2				
31	ホオジロ	1	1	1	1	
32	カシラダカ			1		
33	カワラヒワ	2		1	1	
34	マヒワ			1		
35	ベニマシコ			1		
36	ウソ			1		
37	スズメ	1	1			
38	ムクドリ	1				
39	カケス	1	1	1		
40	ハシボソガラス			1	1	1
41	ハシブトガラス	2	1	2	1	
合計	41種	22種	20種	21種	11種	4種
		41種				

備考) 数字は確認個体数を示す。

イ. 哺乳類

ア) 確認概要

現地調査の結果、7目13科19種の哺乳類を確認した。確認した哺乳類のリストは表9-12-11、その位置は図9-12-3(1)～(4)に示すとおりである。調査範囲内の哺乳類相は森林を中心に活動するツキノワグマ等の大型哺乳類、森林から農耕地、民家周辺などの広範囲に活動するタヌキ、キツネ等の中型哺乳類、農耕地周辺に多く生息するジネズミやアズマモグラ等の小型哺乳類、河川や溪流に生息するカワネズミと比較的多様な種を確認した。出現回数の多かった種としてはホンドジカで計画地やその周辺域で多くの足跡や糞の痕跡を確認した。また、近年分布を拡大している外来種のアライグマを確認したことで生息域が重なると考えられるタヌキやキツネなどの中型哺乳類の生息状況に変化が生じている可能性があると考えられた。

表 9-12-11 哺乳類確認種リスト

No.	目名	科名	種名	学名	計画地内				周辺域				確認状況
					夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季	
1	モグラ目 (食虫目)	トガリネズミ科	ジネズミ	<i>Crocidura dsinezumi</i>									● 死体
2			カウネズミ	<i>Chimarrogale platycephala</i>									● 死体
3		モグラ科	アズマモグラ	<i>Mogera imaiizumi</i>	●								● 坑道・塚
4	コウモリ目 (翼手目)	ヒナコウモリ科	ヒナコウモリ科の一種	<i>Vespertilionidae Gen. sp.</i>				●					● バッドデイクターによる夜間調査
-		-	コウモリ目の一種	<i>Chiroptera Fam. Gen. sp.</i>				●					● バッドデイクターによる夜間調査
5	サル目 (霊長目)	オナガザル科	ニホンサル	<i>Macaca fuscata fuscata</i>							●		● 糞
6	ウサギ目	ウサギ科	ノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i>							●		● 食痕・糞
7	ネズミ目 (齧歯目)	リス科	ムササビ	<i>Sciurus Iis</i>							●		● 食痕
8			リス科の一種	<i>Petaurista leucogenys</i>							●		● 糞
9			アカネズミ	<i>Sciuridae Gen. sp.</i>									● 食痕
10		ネズミ科	アカネズミ	<i>Apodemus speciosus speciosus</i>				●					● 捕獲・食痕
11			ヒメネズミ	<i>Apodemus argenteus argenteus</i>				●					● 捕獲・キツネ糞中
-			カヤネズミ	<i>Micromys minutus japonicus</i>				●					● 糞
-			ネズミ科の一種	<i>Muridae Gen. sp.</i>				●					● 食痕
12	ネコ目 (食肉目)	クマ科	ツキノワグマ	<i>Selenarctos thibetanus</i>									● 爪痕
13		アライグマ科	アライグマ	<i>Procyon lotor</i>									● 無人撮影
14		イヌ科	タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides viverrinus</i>									● 糞・無人撮影
15			キツネ	<i>Vulpes vulpes japonica</i>									● 糞・無人撮影
16			テン	<i>Martes melampus melampus</i>				●					● 足跡・糞・無人撮影
17		イタチ科	イタチ	<i>Mustela itatsi itatsi</i>									● 糞
-			イタチ科の一種	<i>Mustelidae Gen. sp.</i>									● 糞
-		-	ネコ目の一種	<i>Canivora Fam. Gen. sp.</i>									● 糞・無人撮影
18	ウシ目 (偶蹄目)	イノシシ科	イノシシ	<i>Sus scrofa leucomystax</i>									● 糞・無人撮影
19		シカ科	ホンドジカ	<i>Cervus nippon nippon</i>				●					● 目撃・足跡・糞・無人撮影
-		-	ウシ目の一種	<i>Artiodactyla Fam. Gen. sp.</i>				●					● 目撃・足跡・糞・無人撮影
合計	7目	13科	19種		1種	5種	1種	6種	7種	10種	10種	13種	-

(備考) ・種名及び配列は平成24年度版「河川水辺の国勢調査のための生物種リスト(財団法人リバーフロント整備センター)」に従った。
 ・コウモリ目の一種、リス科の一種、ネズミ科の一種、イタチ科の一種、ネコ目の一種及びウシ目の一種については種数から除外した。

イ) トラップ調査

トラップ調査ではアカネズミとヒメネズミの2種を確認した。トラップ調査の結果は表9-12-12に示すとおりである。

アカネズミは全地点で確認され、ヒメネズミは主な環境が広葉樹である M2でのみ確認され、延べ3個体であった。

表9-12-12 トラップ調査結果

種名	M1(計画地内)				M2(広葉樹)				M3(針葉樹)				M4(針葉樹)			
	夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季
アカネズミ		1			1				1		1		1	3		1
ヒメネズミ						1		2								

備考) 数字は捕獲個体数を示す。

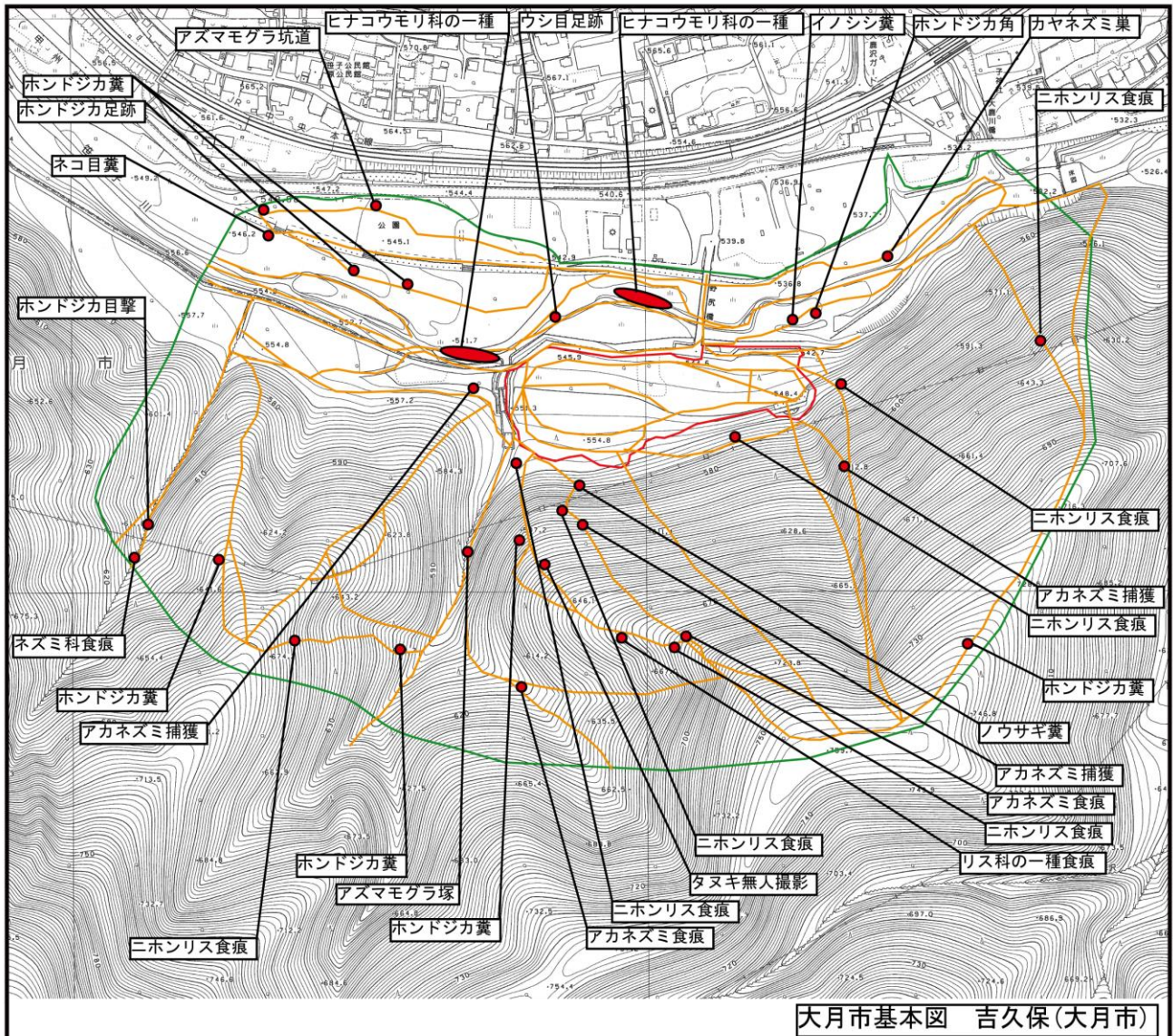
ウ) 夜間調査

夜間調査ではヒナコウモリ科の一種とコウモリ目の一種の2種を確認した。夜間調査の結果は表9-12-13に示すとおりである。2種ともにバットディテクターでの確認であり、種までの同定は困難であったため、科または目の一種までの同定に留めた。

ヒナコウモリ科の一種はバットディテクター50kHz帯で夏季、秋季及び春季に計画地周辺の河川上空及び広葉樹林上空を飛翔する個体を確認した。コウモリ目の一種はバットディテクター20kHz帯で春季に計画地上空の高空で飛翔する個体を確認した。

表9-12-13 夜間調査結果

種名	夏季	秋季	冬季	春季	備考
ヒナコウモリ科の一種	○	○		○	BD50kHz
コウモリ目の一種				○	BD20kHz



大月市基本図 吉久保(大月市)

凡 例

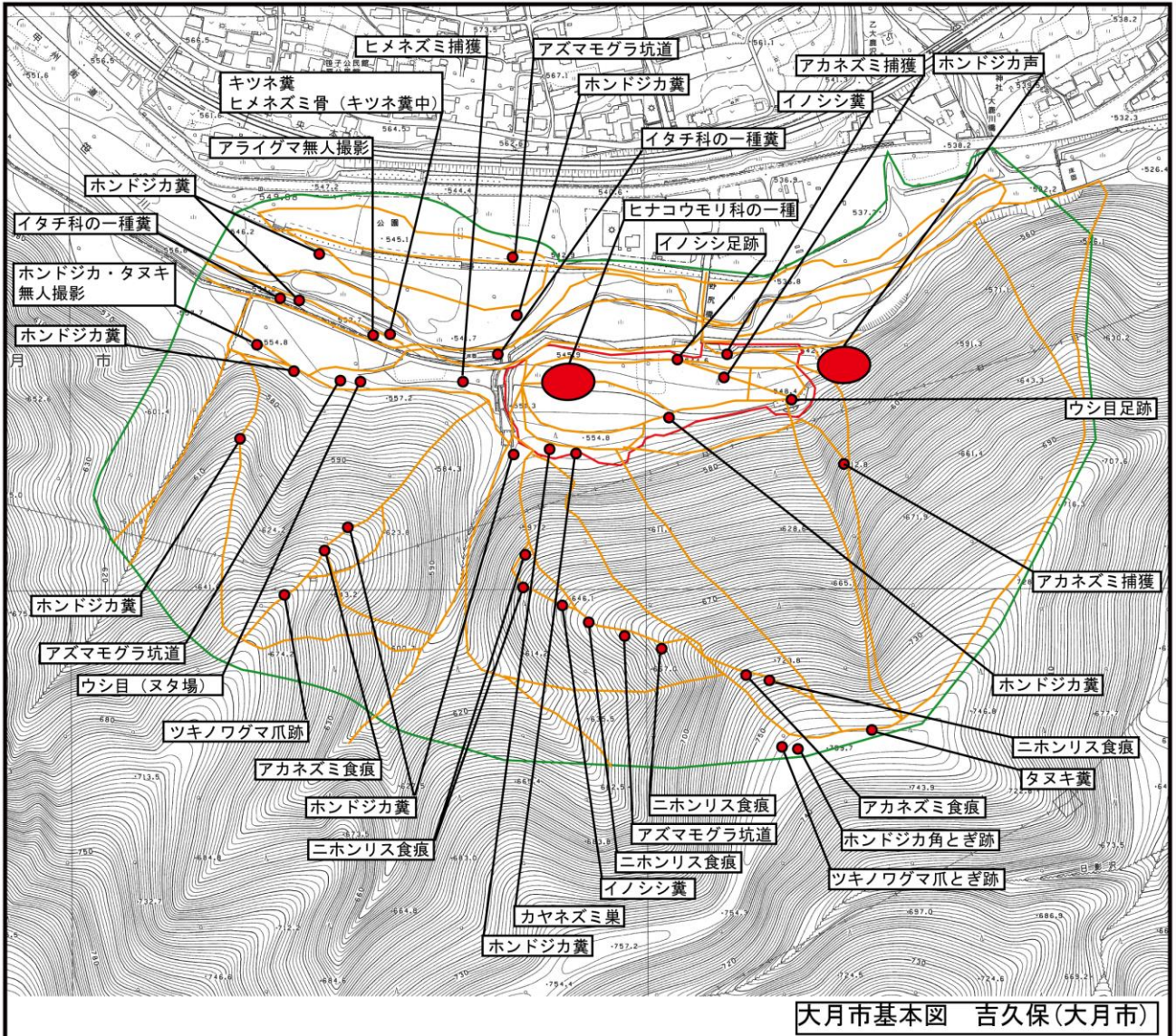
- : 計画地
- : 陸上動物調査範囲
- : 踏査ルート



S=1:6,250



図 9-12-3(1) 哺乳類確認位置図(夏季)



凡 例

: 計画地

: 陸上動物調査範囲

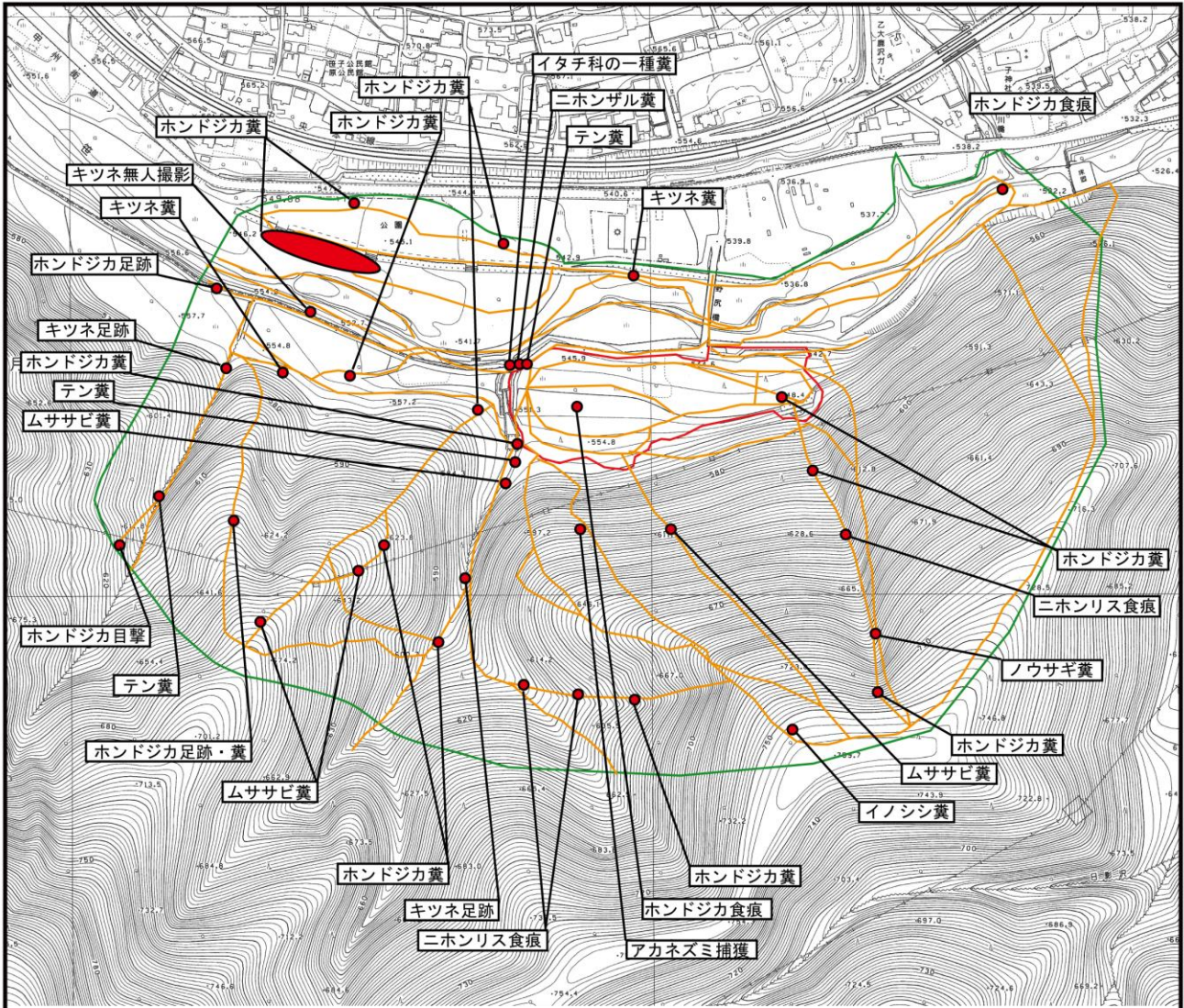
: 踏査ルート



S=1 : 6, 250



図 9-12-3 (2) 哺乳類確認位置図(秋季)



大月市基本図 吉久保(大月市)

凡例



: 計画地



: 陸上動物調査範囲



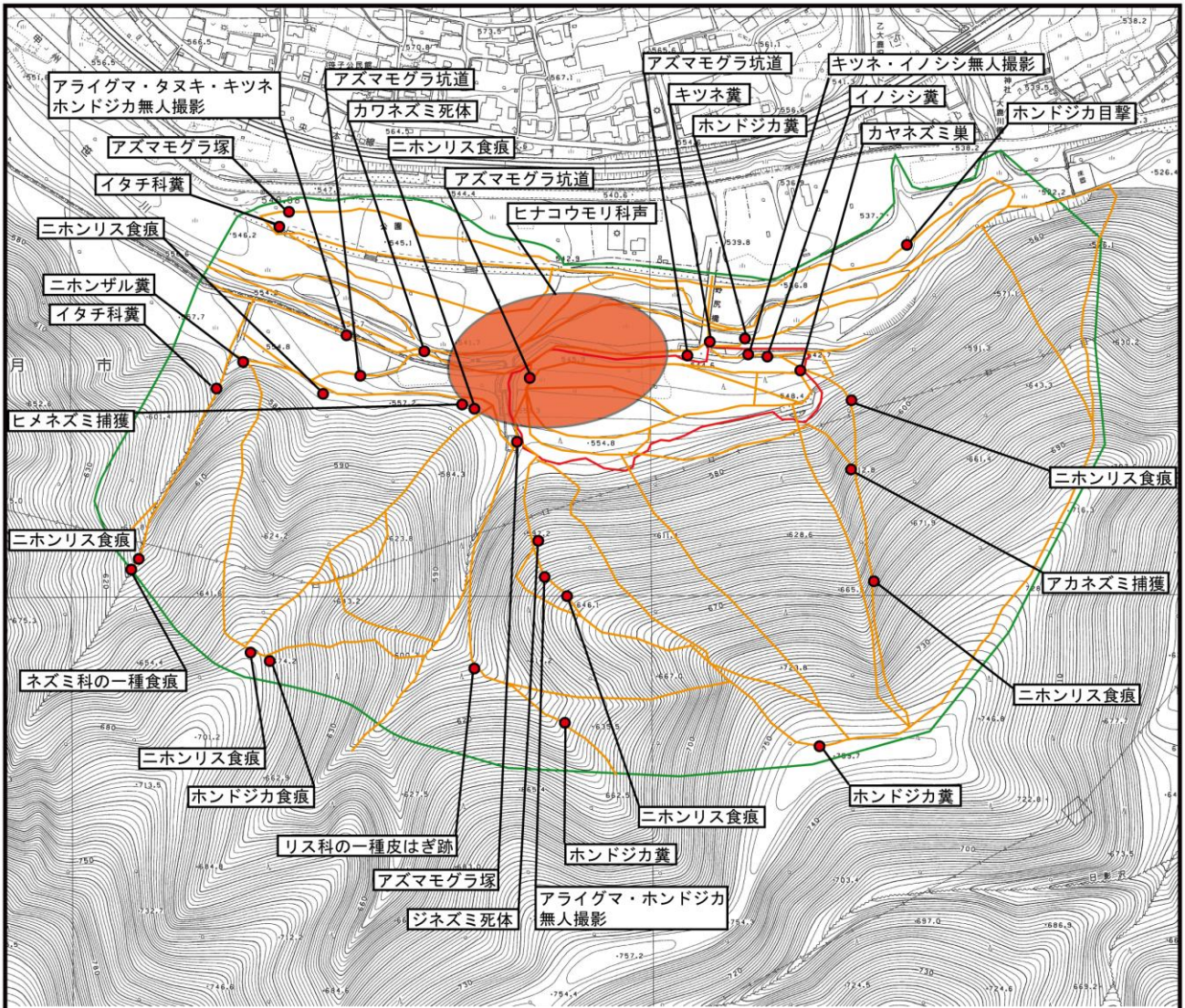
: 踏査ルート



S=1:6,250



図9-12-3(3) 哺乳類確認位置図(冬季)



大月市基本図 吉久保(大月市)

凡例

- : 計画地
- : 陸上動物調査範囲
- : 踏査ルート



S=1:6,250



図 9-12-3(4) 哺乳類確認位置図(春季)